三上日出夫先生を送ることば

内田　　實

三上日出夫先生は札幌大学が創設された昭和42年（1967）4月に赴任され，翌43年札幌大学女子短期大学部設立に際して教養部から移られ，短大部長を務められました。以来21年間に短大は国文学科・英文学科20回の卒業生と文化学科・経営学科経営管理専攻・秘書専攻6回の卒業生を送り出し，その総数は実に6,772名に及んだのであります。三上先生はこれら短大の学生達の生物学の先生であると共に，札幌大学一般教育課程の学生たちの生物学の指導にもあたられました。先生のお話しによれば，1984年以降の5年間のみでも7,236名（今年度は1,600名）の学生に直接授業をなされたとのことで，おそらく教養部時代を含めた22年間に先生の御薫陶を受けた学生の総数は1万5千人近くになるものと推測されます。

三上先生はまた，これら学生のよき相談相手として信望を集められると共に，学内の要職に就いてその責を果たされ，本年3月定年をお迎えになり，御退職なされることになりました。

開学当初国文学科・英文学科定員各50名を以て出発した女子短期大学部は，今や4学科，各学年の定員530名という，名実共に備わった女子の学園に発展し，地元北海道は勿論のこと，遠く九州・四国からも学生を集める迄に至りました。思えばこのような短大の成長の道程は決して平坦なものではなく，その間には様々な紆余曲折がありました。その中にあって三上先生は恰も北極星の清けき光芒にも似た，一歩も譲ることなき確固たる教育理念の持主として，教員・職員・学生すべての心のよりどころであり，短大の中心的存在でありました。先生が「いる」というその存在感が私たち短大の教員にとって如何に精神的安定をもたらしていたかは，はかり知ることのできないものでありました。女子短期大学部が今日あるを得たのは三上先生がおられたからであると言っても過言ではありません。

先生は，昭和37年（1962）「日本及び日本近海産のオキツノリ科及びスギノリ科の分類」に対して北海道大学から理学博士の学位を授与されて以来，日本藻類学会，日本植物学会，The International Phycological Society の会員，北海道の日本生物教育学会理事として，多くの業績をつまれました。1970年以降は論文の発表を毎年欠かしたことがなく，多いときには年間4編を数え，その総数47編，著書4冊，諸外国の文献で先生の論文を引用したものは38編に及びます。

なかでも先生は御専門として海産植物の中の紅藻コノハノリ科の研究を行い，1977年にはアメリカのミシガン大学によって，北太平洋のそれらの仲間の先生の研究業績を記念してミカミエラ属 “Genus Mikamiella”（新属）が設立されました。さらに1981年レニングラードアカデミアからエリモ岬で調べた材料をもとにして，ヒデオフィルム属 “Genus Hideophyllum” が新属として設立されています。このように先生の「姓」と「名」でそれぞれの新属が設けられたことをみても，研究活動における並々ならぬ御努力のあとをうかがい知ることが出来るのです。

先生のフィールドは北海道沿岸は勿論のこと，東北の太平洋岸・日本海岸全域，関東では伊豆半島，三浦半島，房総半島，中部では伊勢・志摩から和歌山白浜に至る紀伊半島，四国は松山と高知海岸，九州は長崎と福岡，山陰では島根，越中の富山湾等全国に及んでいます。

一方先生は海外の諸大学・諸機関の herbarium の利用によって，研究の範囲を国内のみでなく諸外国にも拡げられ世界的規模での研究をなさいました。ソビエトの科学アカデミー（レニングラード），イギリスのブリティッシュ・ミューゼアム，オランダのライデン大学，アメリカ合衆国のカリフォルニア大学バークレィ校，サンジェゴ校，アービン校，ミシガン大学，スタンフォード大学，ワシントン大学，スミソニアン・インスティチュート，オーストラリアのアデレード大学，カナダのニューファンドランド・メモリアル大学，ニュー・ブランズウィク大学，ブリティッシュ・コロンビア大学等の植物標本庫によって御研究の深化がなされた如きはその一例であります。

また論文の別刷を請求してきたのはアメリカ，ソビエト，カナダ，東・西ドイツ，フランス，イギリス，イタリア，オランダ，インド，パキスタン，イスラエル，ニュージーランド，オーストラリア，チリ，アルジェリア，ブラジル，プエルトリコ，韓国などの大学・機関で，その数は53にも及びました。勿論国内の関係大学及び台湾の大学とも交流を深めていますが，特筆されますのは「生物学御研究所」から，昭和天皇が葉山で採集されたコノハノリ類の標本同定を先生に依頼され，標本が特別貸出をされたことであります。これらの日本から外国までの海産植物——紅藻コノハノリ科の御研究に加えて北海道新聞社から共著の形で出版された「北海道植物教材図鑑（野の花）」（1977年），「同（続　野の花）」（1979）は，前者が9版を重ねた後，1986年改訂版を出し，後者は現在6版に至っています。植物の本としてはまことに異例の出版回数といわねばなりません。さらに先生は「北海道植物教材図鑑（山の花）」（1984）と，「北海道『海辺の生きもの』」海藻篇を監修出版（1986）され，さらに。本学の演習林の植物目録も作られました。学生のみならず野草や樹木に関心のある人々をつれ，藻岩山や手稲山や西岡水源池周辺で御指導なされたことは何十回に及んだことでしょうか。

研究と教育の両立を実践され，加えて世界的な業蹟をあげられた三上先生が，如何に定年とはいえ学園から去られることは，短大のみならず札幌大学全体にとってまことに大きな損失であることは言うを俟ちません。いま先生をお送りするにあたって，長い間にわたる女子短期大学部運営の御心労に，衷心から感謝と敬慕の念を表すものであります。此度退職記念号に投稿することができた者も，その余裕のなかった者も，共々に，先生への限りなき謝恩の情のあることを御賢察下さいます様お願い申しあげます。

ここにこの紀要を先生に捧げるに際して，先生のこれからの御健勝とさらなる御研究の発展を祈念してやみません。

平成元年（1889）3月20日記